

なごみつうしん

発行日：平成 27 年 4 月 27 日（第 4 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

「障害」って何なのだろう？ 私は医師 5 年目のときにそのことを突きつけられました。これは、私にとって「障害」と向き合う原点となった出来事です。

所長 小沢 浩

「もらってくれてありがとう」

桜の花びらが散り、若葉が顔を出し始めたころ、私の娘は生まれた。初めて授かった子であった。生まれた翌日に病棟に行くと、

「先生、おめでとう。男の子？女の子？」
Bちゃんのお母さんは私の娘の出産をとっても喜んでくれた。Bちゃんは生まれてからほとんどを病院で過ごし、気管切開をして人工呼吸器をつけて日々過ごしていた。なかなか外に行くこともできない。お母さんは毎日病院に通っていた。Bちゃんは元気にそして一生懸命に生きていた。しばらく娘の話をした後、少しの沈黙の後、

「もしよかったらうちの子の洋服をあげたいんだけどもらってくれる？」

とお母さんが話してきた。Bちゃんはいつもブランドの服を身にまとっていた。

「ありがとう」と私がお礼を言うと、そのお母さんは更にこうつけ加えた。

「先生、家に帰って奥さんに聞いてからにした方がいいわよ。」

私は、その言葉の意味が解からなかった。

家に帰り早速妻に服をもらえる話をする、「あら、嬉しい！」

と妻も喜んでくれた。さっそく次の日に病院でBちゃんのお母さんにそのことを報告すると、お母さんは、急にうつむいて手で顔を覆った。そして、ささやくような声で「もらってくれてありがとう」

と言ったのであった。その手の奥には、涙があふれていた。



しばらくして、お母さんはぼつりぼつりと話し出した。涙の理由（わけ）を…。

「友達に赤ちゃんが生まれた時にね、Bの服をあげようとしたの。そのときに、やっぱりと断られちゃって。だから、それから怖くなっちゃってね、ず〜っと押入れの奥にしまっておいたの。でも、先生だったら

もらってくれるかもしれないと思って、勇気をふりしぼって言ったのだ。」

一週間後の土曜日、誰もいない薄暗いロビーで待っていると、お母さんがそのベビー服を持ってきてくれた。両手いっぱい段ボールを抱えて…。その段ボールを置くと、「待っててね。まだあるの。」

と言って、また駆け出して行った。もう一度段ボール箱を抱えて戻ってきたお母さんはニコニコして段ボールを開けた。段ボール箱一杯に入った色とりどりのベビー服は、お母さんがもう一度洗濯をしてアイロンをかけたのであろう。きちんとたたんでいて、みんな新品のようにきれいで、そして温かい輝きを放っていた。再び服として生を受けたことを喜んでいるかのように。



「お下がり」。私たちは、子どもの頃、お兄ちゃんやお姉ちゃんが着てきた服を順番に着て、それを親戚や友達のお子さんにあげたりしたものである。服をあげるときには、そのお子さんの健やかな成長を祈り、そん

な心も一緒に贈るものである。Bちゃんのお母さんは、誰よりも強く我が娘の成長を祈ったことだろう。私の娘たちはそんな想いのいっぱいだった服を着て成長した。そして今日も生意気な口を利きながら元気に過ごしている。

この出来事は、私が「障害とは何か？」考えるきっかけとなった。私は、日々、障害児という子たちを診ている。だから、服をもらうことも抵抗がない。この子たちの素晴らしさをいっぱい教えてもらっている。でも、私がこの仕事をしていなかったらどうだろうか。私も同じように断っていたかもしれない。Bちゃんのお母さんも同じだろう。断った人、それは私なのかもしれない。だからこそ、このことを教えてくれる子どもたちに感謝するのである。

『奇跡がくれた宝物—いのちの授業—』

小沢浩著、クリエイツかもがわより

